

東京都の古民家の間取りの変遷過程に関する一考察 平面と軸組の関係に着目して

A Study on Changing of Traditional House in Tokyo Focus on Relationship Between Plan and Wooden Framework

○弘世蓉子¹, 重枝豊² 加藤千晶³*Yoko Hirose¹, Yutaka Shigeeda², Chiaki Kato²

Abstract: The transition of the plan of 21 existing traditional house in Tokyo. To expand a building scale in a beam row direction by changing the length of a three-story beam for adding a lower house to beam row or building a stud while changing the layout changing method. It is divided into three patterns. Type 2 is a Kasuya house, and you can see that no change is seen in the shed. Type 3 is a the Nagasaki house, and when changing from the Hiroma type to the four-room layout, the Nagasaki house has a single extra roof beam on the back and is expanding by taking the leaner into the roof. The study focuses on the relationship between the layout and the frame of a private house, so that one part of the system of building a traditional house and the factor of setting the layout. The purpose of this research is to classify existing remains of Tokyo by paying attention to differences in development systems.

1. 序

1-1. はじめに

武蔵野の江戸時代初期本百姓の民家は、土間境のヒロマと呼ばれる部屋を中心にして、その奥の南側にはデイ（客間）、北側にはナンド（寝室）がつくいわゆるひろま型の間取りが成立していた。しかし、江戸時代中期からヒロマを南北に仕切った、いわゆる喰違い四間取りとなり、さらに江戸後期には整形四間取りとなった。（注1）間取りの変化を平面で考えることは一般的である。

1-2. 間取りの変化と軸組の関係

東京都の現存遺構 21 棟（注2）の間取りの変遷を整理した。間取りの変化の仕方は、①祖型の柱配列を利用するもの②上屋には変化を加えないが、梁行または桁行に下屋を付加する、間柱を立てるなどするもの③上屋梁の長さを変更して梁行方向に建築規模を拡大する

ものの三つのパターンに分けられる。②の例は図1 粕谷家住宅で、上屋に変更は見られないが下屋を付加しているのが見て取れる。③の例は図2 長崎家住宅で、ひろま型から四間取りへの変化に際し長崎家は背面に一間の追加の上屋梁を架け、さらに下屋を上屋に取り込んで拡張している。①②と③では祖型や間取りの変化の仕方が異なるが、同じ間取りに分類されており不足があるように思う。

1-3. 研究目的

本研究は民家の間取りと架構の関係性に注目することで民家を作るシステムの一端、間取りを決める要素などを知ることができるのではないかという視点に立っている。本研究の目的を①東京都の現存遺構の間取りの分類を、発展系統の相違に着目して行う事②東京都の遺構を群で見た際の間取りの変遷の仕方においての相関関係を明らかにする事の二点を、架構との関わりに注目して、比較分析を行う事とする。また、東京都の現存遺構に関する資料には架構図のあるものが非常に少ないため、架構の比較検討に際して現存遺構についての架構資料作成を行うことも一目的とする。

1-4. 研究方法

平面の分析には、より多くの棟数での比較を行うため、都の民家緊急調査報告書1)に記載されている平面図と、現存遺構の平面図を用いる。架構の分析には、現存遺構のものを用いるが、棟数の不足を補うため研究を進める段階で必要に応じて他県の資料も用いることとする。その際には平面の分析にも必ず加えること

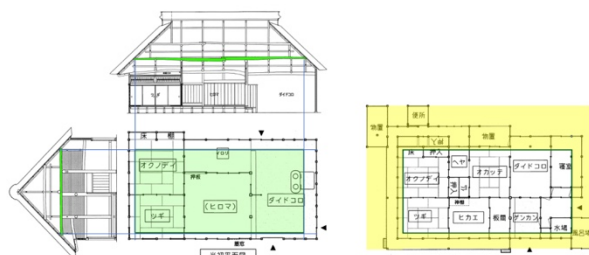


図1 粕谷家住宅の変化の仕方

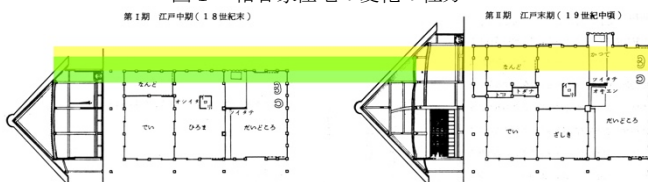


図2 長崎家住宅の変化の仕方

とする。現存遺構の修理工事報告書を最も信頼できる資料とする。

2. 東京都の民家、平面の分類

民家緊急調査報告書や現存遺構に見る東京都の民家は、ひろま型・整形四間取り・喰違い四間取りの三種類に分けられる。多室型と言われるものも概ね整形四間取りと喰違い四間取りを基調としていることが見て取れる。数量で見ると、整形四間取り及びこれを基調とする間取りが圧倒的に多く、民家の間取り変遷に整形四間取りを目指す大きな流れが存在したことが改めてわかる。

緊急調査報告書の民家を表1にまとめた。整形四間取りや喰違い四間取りそれぞれを基調とする民家の平面は、土間に向かって拡張していくものと、床上は大きく変化させずに土間だけを前面に張り出すもの、逆に床上部分を背面に拡張していくもの、そしてこれが最も主流であるが梁間方向の規模は変えずに、桁行方向に部屋を付加して拡張するものがある。(別紙資料に平面図掲載)年代を示す情報の不足により現在間取りの派生を編年することは難しいが、いずれも四間取りを区切っていく改造ではなく、外に向かって拡張していく。

3. 軸部にみる分析対象民家の平面特性

以下①,②の架構の構成要素を、創建年代の古い順に並べた分析対象民家の平断面図に示す。①②の定義は『日本における近世民家(農家)の系統的発展』3)の定義を用いることとする。

①上屋・上屋梁

上屋・下屋からなる軸部の上屋は、下屋よりも背の高い柱が立ち周囲に上屋桁を廻す。上屋の柱に梁行方向にかかる梁を上屋梁という。断面で示すと上屋は黄色で示す部である。

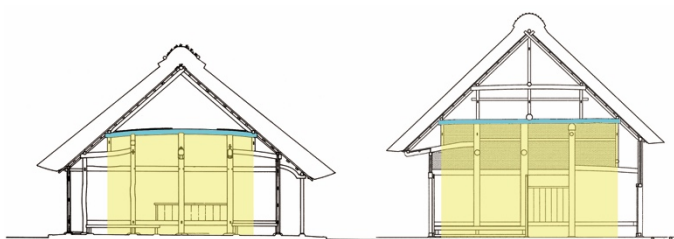


図3 上屋と上屋梁の関係

②下屋

下屋は主屋の周辺の幅半間ないし一間の部分で外側に下屋桁を廻す。ここは上屋より一段低いいため、上屋・下屋で構成される軸部の断面は凸型になる。下屋

には断面で見た際に下図のようにかかり方の異なる二種が存在する。

：上屋梁
：上屋端部の柱
：下屋

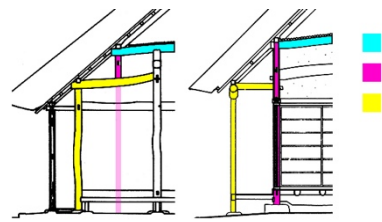


図4 二種の下屋

本稿ではAを取り付き下屋、Bを取り込み下屋とする。B.取り込み下屋は上屋梁端部の柱が省略されている際には必然的にあらわれるものである。上屋と構造的に関わりの深い取り込み下屋は架構の主要部に含まれる。また、取り込み下屋は縁や土庇のような外部空間として使われることはなく、用途面でも主要である。

3-1. 小結

取り込み下屋を多く用いている民家は上屋の柱省略が特に著しい。一方で下屋は取り込み・取り付きの別に関わりなく省略は見られない。年代が降るほど前面の開放が進むのは、古い遺構の床上前面は取り込み下屋で構成されているために柱の省略が叶わかったり、床上前面に上屋より一段下がった下屋がくることで、軒高が低くなってしまっていた点が、上屋で構成されるようになって軒高が上昇したからであるとも考えられる。民家を梁行断面で見ると、おのずと部屋境に柱が多くなる。上屋梁は部屋境に必ず掛かるため梁行方向の部屋境には、柱と上屋柱で作られるフレームもしくは構造の面が出現する。これがひろま型・四間取りどちらとも土間境と、デイ・ナンドとヒロマもしくはザシキ・チャノマ境に作られることとなり、このフレームを桁でつないで民家の架構が作られているとわかる。整形四間取りと喰違い四間取りを基調として拡張した民家の変化の仕方に、桁行方向に伸びていくものが多いのも、フレームを増やしてその間をつなぐ方法で増築していくからであると考えられる。

4. 今後の展望

現存遺構の観察を行った。発展系統による分類、不足資料の補填を行い、分析を進める。

5. 参考文献

- 1) 『民家緊急調査報告書集成』(1998)東洋書林
- 2) 『大田区の民家』(1980)大田区教育委員会
- 3) 『日本における近世民家(農家)の系統的発展』(1985)吉田靖